



Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2007年5月13日(日)

ティアラこうとう 小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
ホルンと弦楽のためのアダージョとロンド*
(六重奏曲 変ホ長調 作品81bより)

アレクサンドル・ボロディン
弦楽四重奏曲 第2番 二長調**

第一楽章 *Allegro moderato*
第二楽章 *Scherzo: Allegro*
第三楽章 *Notturmo: Andante*
第四楽章 *Andante - Vivace*

———— 休憩 (10 分間) ————

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
ディヴェルティメント 第17番 二長調 K.334*

第一楽章 *Allegro*
第二楽章 *Andante*
第三楽章 *Menuetto*
第四楽章 *Adagio*
第五楽章 *Menuetto*
第六楽章 *Rondo: Allegro*

ホルン： 田中 秀樹(1st)
 江花 智子(2nd)
ヴァイオリン： 小西 達也(*1st **2nd)
 真鍋 徹 (**1st *2nd)
ヴィオラ： 浅井 直樹
チェロ： 坂本 謙太郎

2007 年 5 月 13 日(日) 14 時 00 分 開演
ティアラこうとう 小ホール

メシドールの新たな挑戦 ～第7回の節目にあたって～

メシドール・アンサンブル主宰
坂本 謙太郎

フリーメイソンにとって「3」が特別な意味を持つ数字であるように・・・というほどのものではないが、メシドール・アンサンブルと「7」には多少なり縁がある。最初の演奏会が2002年の7月で、取り上げた2曲の作曲時期も共に7月。加えて、出演者が7人。これらに端を発し、このプログラムの表紙に印刷されている半円型のロゴマークも、実はこの数字をデザインしたものである(横広に太字で「7」と書いた紙を筒状に丸め、下から見ると何となくお分かり頂けるはず・・・)

ともあれ、メシドールが2007年に第7回の演奏会という節目を迎えることになった(客観的には節目でも何でもないが)。設立以来5年間に登場した出演者は21人にのぼる。それぞれに職業を持った社会人の集団であるが故に、ある者は転勤・転職で東京を離れ、ある者は出産・育児で音楽を離れ・・・という事情もある。しかし、人材の流動性が高い一番の理由は、メシドールがそのようなあり方を志向してきたことに他ならない。

メシドールはその設立以来、積極的に参加したい者だけが参加するという理念を一貫して保持している。それによって、メンバーに縛られることのない、自由なプログラミングが可能に

なっているし、全てのプレーヤーが純粹に自らの音楽的欲求を満たすためにのみ演奏会に臨むという状況も保たれている。

音楽を生業とする演奏家のように、収入や名誉を求める必要も、余裕を持って演奏する必要も、批評を恐れる必要もない。聴衆を楽しませるということを念頭に置きつつも、時に自分の能力の限界を超えてでも、自らが欲するままに自由に表現することが出来るのはアマチュア音楽家の特権である。演奏会のたびに頂戴するアンケートを見ると、アマチュアの演奏を好んで聴いて下さるお客様も少なからずいらっしゃるようだが、それはこの特権ゆえであると信じたい。

メシドールが節目を迎えるに当たり、我々は改めてこの原点を確認し、いよいよその特権を謳歌しようと考えた。それでこそアマチュアならではの魅力を作り出すことが出来ると思うが故に、である。

これまでも何度となく無謀なプログラムに果敢に挑戦してきたメシドールだが、上記の事情から、今回はそれに拍車が懸っている。本日演奏する三曲は、室内楽の名曲であり、なおかつ、多分に協奏曲的な要素を持ったものばかりである。我々の狙い通りお楽しみ頂けると良いのだが・・・。

ベートーヴェン

ホルンと弦楽のための

アダージョとロンド

(六重奏曲 変ホ長調 作品 81b より)

この曲は 1795 年、ベートーヴェン (1770-1827) 25 歳の作品である。1792 年に生誕の地ボンからウィーンに移り住んだベートーヴェンは、それから 3 年間ハイドンやサリエリらの下で作曲法の習得に専念し、一切の作品を残していない。1795 年は勉学の成果がいよいよ曲となって現れる最初の年である。これ以降 1800 年までの 5 年間、ベートーヴェンは管楽器を主体とした室内楽曲を集中的に作曲している(その最後が昨年メシドールで取り上げた七重奏曲である)。これらの作品によってベートーヴェンは管楽器の扱いに習熟し、1800 年以降の交響曲の基礎を築いていったと考えられる。

ベートーヴェンのこの時期の作品の多くは食卓音楽と評される。すなわち、王侯・貴族の食事中あるいはパーティの場で演奏されるディヴェルティメント的な音楽ということである。しかし、少なくともこの曲に関する限り、これは適切な評価とは思えない。2 本のホルンが技巧の限りを尽くし、掛け合い、競い合う様は、二重協奏曲以外の何物でもない。これを食事中に演奏したら、聴衆の注意を惹き過ぎて、間違いなく食卓の会話の妨げになるであろう。ホルンの妙技を存分にお楽しみ頂きたい。

ボロディン

弦楽四重奏曲 第 2 番 二長調

この曲には作品番号がない・・・ということは、これが作曲家の生前に出版されなかったことを意味している。

ボロディン (1833-87) は、グルジア王家の非嫡出子として生まれ、化学を専攻し、軍医として働いた人物である。化学の世界でもアルデヒドの研究者として知られ、ボロディン反応なる化学反応が存在するらしい。

ボロディンの本業は生涯に渡って化学であり、音楽に専念したことはない。それどころか 30 歳でバラキレフ (1837-1910) に会うまで、作曲を学んだこともなかった。そういう意味で究極のアマチュア音楽家なのである。この曲が生前に出版されなかったのも、このような事情によるものであろう。

この曲は現在広く知られており、しばしばロシアを代表する室内楽曲とさえ言われる。特に第 1 楽章は某テレビ局の衛生放送で多用されている(らしい)し、第 3 楽章は「夜想曲」「ノクターン」などの名で単独に演奏されることも多いので、お聴きになったことのある方も少なくないだろう。

全篇に渡り第一ヴァイオリンとチェロの活躍が目立つが、ヴァイオリン同士の掛け合いやヴィオラの対旋律も見逃ごせない。なお、今回の演奏会では曲の構造に応じて、楽器の配置を変えているが、この曲では特にその意図・効果をご確認頂けると思う。

モーツァルト

ディヴェルティメント

第 17 番 二長調 K.334

モーツァルト(1756-91)の人生は大きく3つに分けることが出来る。ヴァイオリン・ピアノの演奏に秀でた神童としてヨーロッパ各地の宮廷で注目された幼少期、ザルツブルク大司教に仕えた十代後半からの約十年間、そしてウィーンで活躍する二十代半ばから没するまでの十年間である。各時代を比較すると、彼の音楽に対する姿勢の変化が目立つ。君主に仕えることなく、フリーの作曲家・芸術家としてのあり方を求めたウィーン時代のモーツァルトと比べると、ザルツブルグ時代の彼は多分に職人的であるということが出来る。

1777-79年、20代前半のモーツァルトは仕官先を求めてミュンヘン・マンハイム・パリを巡ったものの、これと言った成果のないまま故郷ザルツブルグに戻った。彼は既に神童として持て囃される年齢ではなく、むしろこの時代の最先端の音楽から遅れを取っていたのである。従って、この頃のモーツァルトは王侯・貴族の求めに応じて、流行を追った曲を提供するという傾向が強い。

ザルツブルグ帰郷(1779年)後、モーツァルトは再び大司教に仕えた。その後ウィーン移住までの3年間は、彼にとって、宮廷オルガニストという不満足な地位に甘んじる抑圧された日々であった。しかし、それは同時に職人

から芸術家に羽化する前のサナギの時期とも言える。この時期のモーツァルトは決して多作ではないが、一方で、少しずつ自分自身の言葉で語り始めるのである。

この曲は、まさにその時期を象徴するものである。形式的にはディヴェルティメント～喜遊曲：宮廷でBGM的に使われる音楽～の形を採ってはいるものの、内容はもはやその枠に収まりきっていない。むしろ、長大なヴァイオリン協奏曲の様相を呈しており、聴く者に対して、極めて雄弁に傾聴を迫ってくる。ザルツブルグ時代の集大成、そして、次なるウィーン時代を予感させるというに相応しい作品である。第一ヴァイオリンの縦横無尽の活躍に乞うご期待！！

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当します。第一回演奏会の開催日、そこで取り上げた二曲の作曲時期が全てメシドールの一ヶ月に収まっていたため、グループ名としました。

メシドール・アンサンブルは演奏会のたびに いくつか演奏したいと思っていた曲 を携えた有志が集う緩やかな集団です。このため取り上げる曲の楽器編成も、メンバーの顔ぶれも毎回変わります。今後の演奏会にもご期待ください。

なお、出演者のプロフィール・今後の活動に関しては、当団のウェブサイト (<http://messidor.hp.infoseek.co.jp>) にてご覧頂くことが出来ます。

これまでの演奏会

第一回 (2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール)

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第一番 二短調 作品 49 (フルート・チェロ・ピアノ用編曲版)

ブラームス：クラリネット五重奏曲 四短調 作品 115

第二回 (2003年7月6日 於：幕張ベイタウン・コア 音楽ホール)

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」作品 76-2

ビゼー/シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 へ長調「アメリカ」作品 96

第三回 (2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285 / オーボエ四重奏曲 へ長調 K.370 /

アダージョとロンド 八短調 K.617 / ピアノ四重奏曲 第一番 ト短調 K.478

第四回 (2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール)

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第一番 変ホ長調 作品 12

キュフナー(伝ウェーバー)：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「鱒」作品 114

第五回 (2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール)

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト/ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第一番 二長調 作品 11

第六回 (2006年4月30日 於：ティアラこうとう 小ホール)

モーツァルト/ロットラー：木管五重奏曲 八短調

ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 作品 20

出演者の横顔

ホルン：田中秀樹

中学校でトランペット、大学でホルンをはじめる。同志社交響楽団では、初ステージでリストの交響詩「前奏曲」のソロを吹いたのを契機に卒団までのほぼ4年間トップ奏者を務める。

仕事の傍らホルン三昧の日々。現在は江東シティオーケストラに所属している。室内楽にも積極的で、メシドール・アンサンブルには昨年に続き2度目の登場。

ホルン：江花智子

本人は「高い音が苦手なだけ」と謙遜するが、下吹きホルン吹きとして貴重な存在である。市原フィルハーモニー管弦楽団に所属しているが、都内の複数のオケにも顔を見せる。ウィークデーは某食品会社に勤務。音楽とお酒を愛し、特技は居眠り(本人の弁)。

ヴァイオリン：小西達也

幼少の頃からヴァイオリンを始める。学生時代にはコンサートマスターとして上智大学管弦楽団を率いメニューインに Marvellous!! という賞賛の言葉を連発させた。

証券会社就職後はオーケストラ活動を休止するも、5年間の英国駐在中、ヨーロッパ各都市のライブ演奏・湿度感覚・自宅の天井の高い空間から大きな刺激を受け、ヴァイオリン本来の響きとフレージングの研究に励んだ。帰国後はソロ・室内楽・オーケストラの他ポピュラー音楽のライブにも登場。月2~3回の本番をこなしている。

ヴァイオリン：真鍋 徹

ヴァイオリンをはじめて早37年。14歳のときアイザック・スターンの薫陶を受け、人生が変わったらしい。過去20年の間に、上智大学管弦楽団・かもめ管弦楽団をはじめ、全国各地のオーケストラでコンサートマスターを務めている。

ヴィオラ：浅井直樹

4才よりヴァイオリンを、27才よりヴィオラを、40才よりチェロをはじめ今日に至る。弦のマルチプレーヤーを目指すことが一つのライフワークになっている。

慶応義塾大学ワグネル・ソサイエティ・オーケストラにてオーケストラ活動を開始し、以来30年に渡って国内各地のアマチュアオケで演奏活動が続けている。

チェロ：坂本謙太郎

13歳からコントラバスをはじめ、15歳でチェロに転向。上智大学管弦楽団・アンサンブルムジカ・幕張ベイタウン・オーケストラ・かもめ管弦楽団等で首席奏者を務める。

平日は某シンクタンクに勤務。メシドールの本番が近づくとなぜか忙しくなる仕事をしている。たまには電車の走っている時間に帰りたい、とぼやく毎日。

メシドール・アンサンブル主宰者であり、過去21人の出演者のうち、全ての演奏会に出演している唯一の奏者でもある。

